



小学生の美術館での鑑賞を通じた学びについての一
考察：
作品についての「好き」，「想像」，「情報」を中
心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2019-10-08 キーワード: 作成者: 菊地, 惟史, 中村, 珠世, 森實, 祐里, 李, 知恩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006822

小学生の美術館での鑑賞を通じた学びについての一考察

作品についての「好き」、「想像」、「情報」を中心に

菊地 惟史・中村 珠世*・森實 祐里*・李 知恩**

北海道教育大学札幌校美術科教育学研究室

*北海道教育大学岩見沢校美術科教育学研究室

**北海道教育大学札幌校デザイン研究室

What Elementary School Students Learn When They Visit Art Museum

Focusing on the Discovery of their Favorability, Imagination, Pleasure and Knowledge of Art works

KIKUCHI Tadafumi, NAKAMURA Tamayo*, MORIMI yuuri* and LEE Jieun**

Department of Art Education, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

*Department of Art Education, Iwamizawa Campus, Hokkaido University of Education

**Department of Design, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

概 要

学習指導要領等において美術館を利用した鑑賞活動の有用性が述べられ、平成20年度より札幌市でも札幌市の小学生を対象に「ハロー！ミュージアム」という取り組みがある。それにより、著者自身も教室ではできない学びを経験する小学生の姿を見てきた。しかし、小学生が美術館というものをどのように捉えていて、どのように感じているか、何を大切にしているかについて今まで明確に示されたことは殆どなく、教師として美術館での鑑賞活動の指針を持ちにくい現状である。そこで、よい鑑賞の環境を設定するにあたっては、小学生がこれまでの美術館での鑑賞活動についてどのように思っているのか、どのように学んでいるのかを把握することが求められると考えた。本研究では小学生が美術館での鑑賞活動を行う際に、1 「好き」と思える作品を見付けながら、鑑賞する。2 作品から様々な「想像」をしながら鑑賞する。3 作品や作者についての「情報」にこだわらない。という3つの仮説を立て、札幌市内の小学校を対象に調査を行ない、小学生の美術館での鑑賞活動の有用性を明らかにした。

I 研究背景

図画工作の学習指導要領に、「各学年の「B鑑賞」の指導に当たっては、児童や学校の実態に応じて、美術館などを利用したり、連携を図ったりすること。」¹「利用においては、鑑賞を通して「思考力、判断力、表現力等」を育成する目的で行うようにするとともに、児童一人一人が能動的な鑑賞ができるように配慮する必要がある。」²と示されている。

平成20年度より札幌市には、「ハロー！ミュージアム」という取り組みがある。これは、札幌市の小学生の文化芸術を愛好する心情と豊かな情操を養うことを目的とし、市内の小学5年生を学校単位で札幌芸術の森、本郷新彫刻美術館等に招待し、芸術作品の鑑賞およびそれを踏まえた表現活動に取り組む機会を提供するというものである。

著者が平成25年度に小学5年生を担当した際にも、この「ハロー！ミュージアム」で、札幌芸術の森野外美術館での鑑賞学習を行った。グループで美術館を見て回る中で、「この作品はこういうことを表していると思う。」と、作品について想像したり、「私はこう思う。」「そういう風にも見える。」などお互いの考えを交流し、作品に対する見方や感じ方が広がったり深まったりしている小学生の様子から、教室ではできない学びを得ていると感じた。

しかし言うまでもなく、ただ美術館に行けばそれでよいということではない。小学生の美術館での鑑賞活動の場をより有効的に設けるためには、小学生が美術館をどのように捉え、何を大切にし、どのように学びに生かしているのかなどといった実態を捉えることが教師にとっての重要な課題と言える。

II 研究仮説

美術館での鑑賞活動についての実態把握の必要性から、これまでの実践に基づき、以下の3つの仮説を立てた。

小学生が美術館での鑑賞活動を行う際に、

- 1 「好き」と思える作品を見付けながら、鑑賞する。（以下「好きを見つける」とする）
- 2 作品から様々な想像をしながら鑑賞する（以下「様々に想像する」とする）
- 3 作品や作者についての情報にこだわらない。（以下「情報にこだわらない」とする）

III 調査方法

III-1 調査参加児童

札幌市立円山小学校にて、北海道立近代美術館やその他の美術館で鑑賞活動の経験を持つ小学3年生から6年生を対象に、質問紙による調査を行った。

小学3年生40名（男22 女18）

小学4年生39名（男20 女19）

小学5年生33名（男14 女19）

小学6年生31名（男15 女16）

調査実施：2018年10月

III-2 質問紙構成

小学生の美術館での鑑賞活動についての実態把握の必要性から、仮説1「好きを見つける」、仮説2「様々に想像する」、仮説3「情報にこだわらない」の下に15項目の質問を設定し、「1当てはまらない」、「2あまり当てはまらない」、「3どちらでもない」、「4まあまあ当てはまる」、「5とても当てはまる」までの5件法で質問した。その回答の理由などについては自由記述で回答を求めた。

仮説1「好きを見つける」を調べるために、3つの質問、①「これが好きだな」と思う作品があった、②「このかき方や作り方がいいな」というところを見つけられた、③はじめはいいと思わなかったけれど、見ているうちに「いいなあ」と思うようになった作品があった、を設定した。仮説2「様々に想像する」を調査するために、3つの質問、④「どんなことを表しているんだろう？」と想像することができた、⑤「これは、こんなことを表しているんだ！」ということが分かった、

15項目の質問項目	
①	「これが好きだな」と思う作品があった
②	「ここのかき方や作り方がいいな」というところを見つけられた
③	はじめはいいと思わなかったけれど、見ているうちに「いいなあ」と思うようになった作品があった
④	「どんなことを表しているんだろう？」と想像することができた
⑤	「これは、こんなことを表しているんだ！」ということが分かった
⑥	「友だちの話を聞いて「そういう想像もできるなあ」と思うことがあった
⑦	何を表しているのか全然分からない…」と感じる作品があった
⑧	作品や、つくった人についてくわしくなった
⑨	「こうやってかいたり作ったりしたらいいんだ」と勉強になった
⑩	作品がたくさんあって楽しかった
⑪	いろいろな種類の作品があって楽しかった
⑫	友だちと話しながらか見ることができて楽しかった
⑬	「美術館にはこんなものもあるんだ」と意外に思う作品があった
⑭	学校から出て、美術館に行くことができて楽しかった
⑮	「また美術館に行きたい」と思った

⑥友だちの話を聞いて「そういう想像もできるなあ」と思うことがあった、を設定した。仮説3「情報にこだわらない」を調査するために、2つの質問⑧作品や、つくった人についてくわしくなった、⑨「こうやってかいたり作ったりしたらいいんだ」と参考になった、を設定した。

その他に「楽しかったと思う」理由を調べるために4つの質問を、「意外な発見」のために2つの質問を設定した。そして美術館での鑑賞についての経験回数や学年による変化などを調べるための質問を設定した（より正確な回答を求めるために、質問紙では質問項目の順番をランダムに入れ替えた）。

IV 調査結果

調査参加児童143名の内、有効回答数は138名であった。また、美術館に行った経験のない児童1名を除いた137名の回答をもとに分析した。

まず、質問①から⑮の項目における平均値・標準偏差を求めたものを表1に示した。また、①から⑮の相関関係を、表2に表した。

質問①から⑮の項目について平均値では、質問①「『これが好きだな』と思う作品があった」の平均値が4.70と最も高い値であり、質問⑧「作品や、つくった人についてくわしくなった」が2.89と最も低い値であり、15項目の平均は4.06であった。質問①から⑮の項目について、統計的有意差があるか調べるために、参加者内分散分析 ($F_{(1,14)} = 13.19, p < .01$) を行ったところ、最も高い平均値であった質問①（平均値4.70）と質問⑩「作品がたくさんあって楽しかった」（4.44）、質問⑪「いろいろな種類の作品があって楽しかった」（4.45）、質問⑭「学校から出て、美術館に行くことができて楽しかった」（4.40）、質問⑮「『また美術館に行きたい』と思った」（4.34）、の5つの項目の間に、統計的な差は見られなかった。この結果から小学生にとって美術館での鑑賞活動は学校ではない場所で色々な種類の多くの作品に触れることを楽しく感じ、好きな作品を見つけている。その結果としてまた美術館に行きたいと思うと言える。以下は3つの仮説に基づき、分析した。

IV-1 仮説1「好きを見つける」について

仮説1「好きを見つける」のための3つの質問では、質問①「『これが好きだな』と思う作品があった」（平均値4.70）、②「『ここのかき方や作り方がいいな』というところを見つけられた」（4.31）、③「はじめはいいと思わなかったけれど、見ているうちに『いいなあ』と思うようになった作品があった」（3.95）のような平均値であった。質問③の平均値が3.95で最も低い結果であったが、3つの質問を合わせた平均値が4.32で「まあまあ当てはまる」に近い結果となり、仮説1は支持された。

表1 15項目の質問項目についての平均値・標準偏差

質問番号	平均値 (標準偏差)
①「これが好きだな」と思う作品があった	4.70 (0.75)
②「ここのかき方や作り方がいいな」というところを見つげられた	4.31 (1.00)
③はじめはいいと思わなかったけれど、見ているうちに「いいなあ」と思うようになった作品があった	3.95 (1.23)
④「どんなことを表しているんだろう?」と想像することができた	4.21 (0.95)
⑤「これは、こんなことを表しているんだ!」ということが分かった	4.01 (1.04)
⑥友だちの話を聞いて「そういう想像もできるなあ」と思うことがあった	3.73 (1.36)
⑦「何を表しているのか分からない…」と感じる作品があった	3.68 (1.34)
⑧作品や、つくった人についてくわしくなった	2.89 (1.28)
⑨「こうやってかいたり作ったりしたらいいんだ」と参考になった	3.74 (1.22)
⑩作品がたくさんあって楽しかった	4.44 (0.82)
⑪いろいろな種類の作品があって楽しかった	4.45 (0.75)
⑫友だちと話しながら見ることができて楽しかった	3.84 (1.44)
⑬「美術館にはこんなものもあるんだ」と意外に思う作品があった	4.26 (1.12)
⑭学校から出て、美術館に行くことができて楽しかった	4.40 (1.01)
⑮「また美術館に行きたい」と思った	4.34 (1.05)

表2 15項目の質問項目の相関関係

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
①	-	.555**	.205*	.426**	.362**	.290**	.028	.195*	.348**	.417**	.408**	.145	.330**	.276**	.428**
②		-	.285**	.375**	.472**	.287**	.089	.472**	.262**	.536**	.594**	.381**	.423**	.505**	.620**
③			-	.251**	.376**	.290**	.048	.242**	.302**	.514**	.401**	.217*	.455**	.381**	.329**
④				-	.519**	.350**	-.052	.294**	.335**	.377**	.313**	.221**	.359**	.215*	.321**
⑤					-	.418**	.013	.342**	.486**	.422**	.439**	.289**	.343**	.273**	.464**
⑥						-	.085	.227**	.401**	.368**	.267**	.529**	.174*	.285**	.250**
⑦							-	.029	.046	.001	.027	.146	.119	.101	-.027
⑧								-	.460**	.367**	.317**	.109	.123	.261**	.311**
⑨									-	.404**	.506**	.209*	.323**	.428**	.559**
⑩										-	.625**	.307**	.258**	.602**	.658**
⑪											-	.080	.396**	.424**	.652**
⑫												-	.162	.447**	.234**
⑬													-	.257**	.366**
⑭														-	.609**
⑮															-

*.は相関係数5%水準 **は相関係数1%水準

3つの質問項目の間で質問①の平均値が最も高く、次に②と③の間に統計的有意差が見られた。

つまり、支持された仮説1「好きを見つける」の質問項目を通して、小学生は表現方法を問わず「これが好きだな」と各自の「好き」な作品を見付け、その次にかき方や作り方について興味を示すことが分かった。また鑑賞を通じた作品についての好感度や印象の変化はそれほど強くなく、小学生は作品の第一印象に対して「好き」と感じていると言える。

Ⅳ-2 仮説2「様々に想像する」について

仮説2「様々に想像する」のための3つの質問では、質問④「『どんなことを表しているんだろう?』と想像することができた」(平均値4.21)、⑤「『これは、こういうことを表しているんだ!』ということが分かった」(4.01)、質問⑥「友だちの話を聞いて『そういう想像もできるなあ』と思うことがあった」(3.73)の、3つの質問を合わせた平均値が3.98で「まあまあ当てはまる」に近い結果となり、仮説2は支持されたと言える。

つまり、小学生は作品から様々な想像をしながら鑑賞をしているという仮説2では、小学生は作品がどんなことを表しているのか想像する力を働かせながら鑑賞し、自分なりの答えに至ったことが示された。しかし、友達とコミュニケーションを取りながら鑑賞するが、他者の視点を取り入れながら想像を広げていくのではなく、自分で想像したことや考えたことを重視していると言える。

Ⅳ-3 仮説3「情報にこだわらない」について

仮説3「情報にこだわらない」のための2つの質問では、質問⑧「作品や、つくった人についてくわしくなった」(平均値2.89)、⑨「こうやってかいたり作ったりしたらいいんだと参考になった」(3.74)の、2つの質問を合わせた平均値が3.31で「どちらでもない」に近い結果となり、仮説3は支持されたとは言えない結果となった。

作品や作者についての「情報にこだわらない」という仮説3では、小学生は作品のキャプションなどから情報を得ることよりも、自分なりの感じ方や見方を優先し、好きと感じる作品を見つけた

り、想像したりすると言える。しかし、描き方や作り方については参考にしようとする傾向が見られる。

以上のことから3つの仮説については、仮説1「好きを見つける」と仮説2「様々に想像する」は支持されたが、仮説3「情報にこだわらない」については支持されたとは言えない結果となった。

Ⅳ-4 「楽しかった」について

以上の3つの仮説以外に「楽しかった」についての4つの質問では、質問⑩「作品がたくさんあって楽しかった」(平均値4.44)、⑪「いろいろな種類の作品があって楽しかった」(4.45)、⑫「友だちと話しながらかんすることができて楽しかった」(3.84)、⑬「学校から出て、美術館に行くことができて楽しかった」(4.40)のような平均値であった。質問⑫の平均値が3.84で最も低い結果であったが、4つの質問を合わせた平均値が4.28で「そう思う」以上の結果となり、小学生は、美術館での鑑賞活動をととても楽しいんでいると言える。多くの作品があることや様々な作品があること、そして学校ではない美術館に行くことを楽しいんでいる様子で見られたが、友だちと話しながらかんすることが予想外に低く、小学生は鑑賞活動において、他者で行うコミュニケーションをさほど重要と考えていないとわかった。つまり、仮説2の考察である「友達とのコミュニケーションを取りながら鑑賞を行うが、他者の視点を取り入れながら想像を広げていくことよりも、自分で想像したことや考えたことをより重視している」とつながる結果となった。

Ⅳ-5 「意外な発見」について

3つの仮説以外に「意外な発見」についての質問2つでは、質問⑦「『何を表しているのかわからない…』と感じる作品があった」(平均値3.68)、質問⑬「『美術館にはこんなものもあるんだ』と意外に思う作品があった」(4.26)のような平均値であった。

つまり、小学生は美術館で作品について否定的に考えることなく、意外な作品があることに気づき、発見をしていると言える。

Ⅳ-6 学年と美術館に行った経験について

最後に小学生が美術館や美術館で鑑賞活動を行う際に、学年が上がることや美術館に行く経験を重ねることによる感じ方や認識に相違はないかということについて調べるために、調査参加児童の学年と美術館での鑑賞経験の回数を表3に示した。その結果、学年が上がることで美術館に行った経験が増えるわけではないことがわかった。

学年毎に質問①から⑮における平均値と標準偏差を表4に、美術館に行った経験毎の平均値と標準偏差を表5に表した。

表3 調査参加児童の学年と鑑賞の経験

	ない	1回	2～4回	5回以上	合計
3年生	1	2	20	17	40
4年生	0	1	18	15	34
5年生	0	0	13	20	33
6年生	0	3	15	13	31
合計	1	6	66	65	138

表4 15項目の質問項目についての平均値・標準偏差(学年)

	3年	4年	5年	6年
①	4.90 (0.30)	4.56 (1.06)	4.79 (0.59)	4.52 (0.80)
②	4.49 (0.75)	4.26 (1.15)	4.21 (1.15)	4.26 (0.91)
③	4.10 (1.24)	3.97 (1.22)	3.91 (1.19)	3.77 (1.26)
④	4.45 (0.59)	3.82 (1.20)	4.33 (0.77)	4.10 (1.03)
⑤	4.05 (0.85)	3.79 (1.30)	4.12 (1.04)	4.10 (0.89)
⑥	3.95 (1.15)	2.79 (1.43)	4.21 (1.12)	3.74 (1.19)
⑦	3.85 (1.33)	3.88 (1.23)	3.45 (1.52)	3.71 (1.30)
⑧	2.49 (1.22)	2.68 (1.43)	3.00 (1.04)	3.52 (1.13)
⑨	3.72 (0.90)	3.59 (1.44)	3.64 (1.39)	4.06 (1.05)
⑩	4.56 (0.71)	4.21 (0.87)	4.55 (0.78)	4.42 (0.87)
⑪	3.31 (0.65)	4.65 (0.59)	4.45 (0.86)	4.42 (0.87)
⑫	4.49 (0.93)	2.53 (1.16)	4.12 (1.12)	4.16 (1.14)
⑬	4.51 (0.90)	4.06 (1.19)	4.27 (1.24)	4.16 (1.08)
⑭	4.79 (0.56)	4.12 (1.23)	4.36 (0.95)	4.26 (1.08)
⑮	4.56 (0.81)	4.18 (1.18)	4.30 (1.22)	4.29 (0.92)

3年生39名 4年生34名 5年生33名 6年生31名

表5 15項目の質問項目についての平均値・標準偏差(経験)

	全体	1回	2～4回	5回以上
①	4.70 (0.75)	3.67 (1.37)	4.55 (0.87)	4.95 (0.22)
②	4.31 (1.00)	3.83 (1.07)	4.02 (1.16)	4.67 (0.62)
③	3.95 (1.23)	3.50 (1.26)	3.86 (1.28)	4.08 (1.17)
④	4.21 (0.95)	3.17 (1.34)	4.08 (1.02)	4.45 (0.72)
⑤	4.01 (1.04)	3.83 (1.34)	3.71 (1.03)	4.34 (0.92)
⑥	3.73 (1.36)	3.50 (0.96)	3.26 (1.37)	4.12 (1.18)
⑦	3.68 (1.34)	3.76 (1.37)	3.64 (1.31)	3.83 (1.40)
⑧	2.89 (1.28)	2.33 (1.25)	2.58 (1.18)	3.26 (1.28)
⑨	3.74 (1.22)	3.17 (1.07)	3.35 (1.21)	4.20 (1.08)
⑩	4.44 (0.82)	3.67 (1.11)	4.23 (0.85)	4.72 (0.64)
⑪	4.45 (0.75)	3.83 (0.90)	4.27 (0.81)	4.69 (0.59)
⑫	3.84 (1.44)	3.00 (1.53)	3.70 (1.48)	4.00 (1.37)
⑬	4.26 (1.12)	4.00 (1.00)	4.29 (1.15)	4.23 (1.11)
⑭	4.40 (1.01)	3.50 (1.38)	4.23 (1.13)	4.66 (0.73)
⑮	4.34 (1.05)	3.50 (1.38)	3.95 (1.12)	4.82 (0.67)

1回6名 2～4回66名 5回以上65名

質問①から⑮において学年が上がることによる変化が見られたのは、質問⑧「作品やつくった人についてくわしくなった」($F_{(3,133)} = 4.46, p < .01$)のみであった。他に、質問④ ($F_{(3,133)} = 3.94, p < .01$)、⑥ ($F_{(3,133)} = 8.35, p < .01$)、⑭ ($F_{(3,133)} = 3.24, p < .01$)でも学年による差は見られたが、質問④⑭は3年生が最も高く、質問⑥は5年生が最も高い結果となり、学年が上がることによる変化とは考えられなかった。また、他の11項目からは差は見られなかった。このことから積極的に情報を得ようとしているというわけではないが、学年が上がるにつれて作品や作者に関する情報に関心をもつ傾向があると考えられる。

反面、質問①から⑮において美術館に行った経験の違いによる参加者間分散分析を行ったところ、表5に示した通り、質問① ($F_{(2,134)} = 12.63, p < .01$)、質問② ($F_{(2,134)} = 8.28, p < .01$)、質問④ ($F_{(2,134)} = 6.70, p < .01$)、質問⑤ ($F_{(2,134)} = 6.48, p < .01$)、質問⑥ ($F_{(2,134)} = 7.49, p < .01$)、質問⑧ ($F_{(3,133)} = 5.65, p < .01$)、質問⑨ ($F_{(2,134)} = 9.71, p < .01$)、質問⑩ ($F_{(2,134)} = 9.88, p < .01$)、質問⑪ ($F_{(2,134)} = 7.85, p < .01$)、質問⑭ ($F_{(2,134)}$

=5.92, $p<.01$), 質問⑮ ($F_{(2,134)}=15.76, p<.01$) の、計11項目に統計的な有意差が見られた。1回より2~4回が、2~4回より5回以上と完全に経験が多くなる程とは言い切れないが、1回より5回以上、2~4回より5回以上など美術館に行った経験が多くなるほど、全体的に平均値が上がる事が確認できた。また、統計的な差は見られなかった質問③⑦⑫⑬のうち、質問③⑫は鑑賞の経験が増えるにつれて平均値が上がる事が確認できた。つまり15項目のうち、13項目から美術館に行った経験が多くなるほど、平均値が上がる事が確認できた。一方、質問⑦⑬は鑑賞の経験とは関係がないという結果となった。

このことから鑑賞の経験が豊富になるほど、想像の力を働かせながら鑑賞したり、鑑賞を楽しんだり、他者の考えたことも受け入れたり、自身の製作と関連づけた見方をしたりするようになっていくと考えられる。さらに、美術館は行けば行くほど、また行きたいと思うということがわかった。

その他、質問⑮「また行きたい」と多くの質問項目が相関の値を示した。中でも3つの「楽しい」に関わる項目、質問⑩作品がたくさんあって楽しかった、⑪いろいろな種類の作品があって楽しかった、⑭学校から出て、美術館に行くことができ楽しかったと強い相関を示した。

大人の偏見として、小学生が美術館に行きたいと思う理由について「通常の座学とは違ったイベント事として学校を出ること」と推測しがちだが、小学生は単に学校を出ることによって楽しいと感じるのではなく、しっかり多くの作品に向き合い、作品鑑賞に期待感を持って、美術館に行きたいと思っていることやその期待感や学びは美術館に行く経験を重ねることで高まる事が確認できた。

V 考察

本研究では小学生の鑑賞経験の実態を知ることが、よりよい鑑賞の環境を設定することに繋がるという考えから、小学生が美術館での鑑賞活動を行う際に、1「好き」と思える作品を見付けなが

ら、鑑賞する。2作品から様々な想像をしながら鑑賞する。3作品や作者についての情報にこだわらない。という3つの仮説を立て、検証を行なった。

その結果、仮説1と2は支持されたが、仮説3は支持されなかった。支持された仮説1「好きを見つける」のための質問項目を通して、小学生が鑑賞を通して自分なりの好きな作品を見付けられたということができ、「好き」という気持ちの働きが、他の項目にある「楽しい」につながっていた。

仮説2では、鑑賞活動において、「好き」と感じる作品を見付け、どんなことを表しているのか想像する力を働かせながら鑑賞し、作品から自分なりの「想像」を広げることが示された。

それに対し、仮説3では、キャプションや教師等の解説による「情報」は、小学生にとってさほど重要でないことも明らかとなった。このことから「有名な作家の作品=良い作品」といった大人の先入観を持ちやすい鑑賞との異なり、小学生は偏見に囚わず、作品の造形的な要素から自分なりの「好き」を見付け、鑑賞していると言える。

換言すると、小学生は美術館での鑑賞活動を通して、多種多様な作品に触れ、「好き」な作品を見付け、自由に「想像」し、自分なりの意味や価値を創り出していると言える。しかし、この力は学年が上がることではなく、美術館での鑑賞の経験を重ねることで育まれていくことから、継続して美術館での鑑賞活動に取り組む有用性が明確になったと言える。

今後は小学生が一人一人の「想像」を働かせ、自分なりの意味や価値を創り出していくような美術館での鑑賞活動とはどういったものなのか、具体的な授業像を検討していきたい。

引用文献・注釈

- 1) 2) 3) 小学校学習指導要領 図画工作編 (2018) 文部科学省

参考文献

マイケル・J・パーソンズ著 尾崎彰宏／加藤雅之訳
『絵画の見方 美提携研の認知発達』（新装版・2015）
山木朝彦 仲野泰生 菅彰編著『美術鑑賞宣言』（2003）

（菊地 惟史 札幌市立円山小学校教諭）
（中村 珠世 附属札幌小学校教諭）
（森實 祐里 札幌市立大倉山小学校教諭）
（李 知恩 札幌校准教授）